

# 歌は世につれ、世は歌につれ

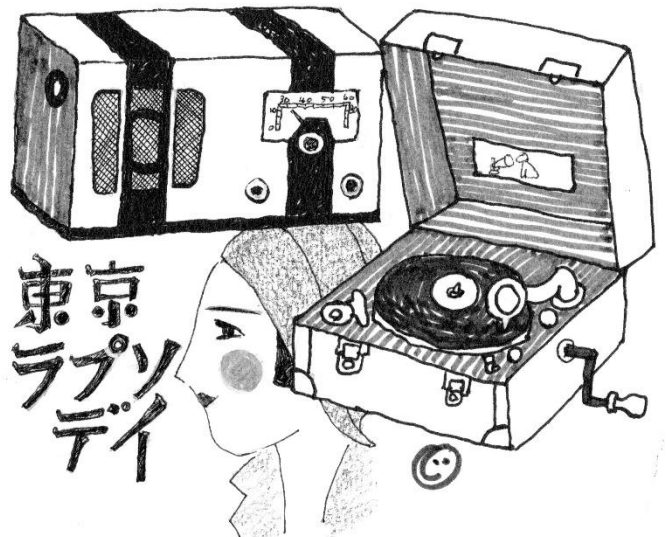
画家 小野寺 純一

開演 5 分前をつけるブザーがなりひびき、会場のざわめきが納まり、ほど良い緊張感がただよってきます。ここは一番町にある電力ホール、令和 5 年 4 月 30 日、東京大衆歌謡楽団仙台公演の開幕です。豪華絢爛たる緞帳がスルスルとあがりますと、待ちました 4 人組がステージに勢ぞろい。すかさずスタートしたのが門田ゆたか作詩・古賀政男作曲、当時のスーパースター藤山一郎の大ヒット曲「東京ラブソディ」であります。“花咲き花散る宵も”ではじまり、楽し都のところでは会場から“みやこ”と声がかかり、恋の都でも“みやこ”との声、ステージと客席が混然一体となり、なつかし青春のあのパワーでラストまでなだれこむのであります。

観客の大半は高齢の男女で、なかには、お子さんや孫らしき人につれられている人たちもいて、楽しんでいる姿はまことに微笑ましく、世代をこえていいもんだと感心しておりましたが、困ったことに私の前の座席に座る青年の体格がすごく立派で、ステージが見えない、さりとて指定満席の会場ですから移るわけにもいかず、もっぱら右側ばかり見ておりました。このホールが出来た 1960

年（昭和 35 年）当時の体格から割り出した寸法だったのでしょう。新電力ホールの折には、そのあたりを考慮してほしいと切に思うのであります。横道にそれてしまいましたが、音楽、とくに民衆に支持された歌謡曲は、直接心に語りかけ、ときには慰め励ます力をもっているものです。私のような団塊の世代も戦前・戦後の流行り歌を聞きながら育ちました。今では古い曲となった名曲の

数々は、ラジオやテレビから流れ、その時々生きて来た時代に、自分のおかれた境遇に寄りそう応援歌だったのです。ホールのステージで演奏する歌謡団に、おひねりがとび、



お花が贈られ、御祝儀を手渡すなど、街頭演奏を思わせ、他のコンサートには見られない民衆パワーでありました。

私の歌謡曲好きは父ハルオの影響が大でありまして、酒をのむと戦時中、満州開拓へ渡った人々の心情を歌った「国境の町」は十八番で、その歌を歌った東海林太郎のヘアースタイルとハルオがよく似ている若き日の写真が残されております。これからは戦後の話、なんといっても外せないのが昭和の歌姫、美空ひばりです。子供なのに歌が上手で、映画に出て歌ったりしておりました。悲しき口笛、東京キッド、リンゴ追分などは、なんてカッコいいんだろうとホレボレしておりました。朝7時、東北放送では松下電器提供「歌のない歌謡曲」をやっておりました、あれは今考えるとカラオケの元祖だったんですね。歌の世界はやがてグループサウンズ・ニューミュージック・Jポップと現在に至っておりますが、さてさて私の歌えるのは今時の歌にはないんですね。でもひとつだけ、ワイルドワウンズの「思い出の渚」ならいけますけど、これも古い歌、すでに遅れているんです。

コロナ禍も終了のきざし、マスクだらけだった街の中も活気がもどってきているようです。これからどんな歌が流行るのか、ちょっぴり興味があります。カラオケ店も繁盛しているようです。